



統合失調症を患う母とともに生きる子ども

～ゆりの日常～

揺れる ー14歳ー



松岡園子

「またクリスマスとお正月が来るのかあ……」

神戸での寒い冬だった。ゆりの祖母が生きていた 2 年前のクリスマスまでは毎年、スポンジケーキを買い、自分でデコレーションをしていた。生クリームを「つの」が立つまで泡立て、絞り袋の口金からクリームを絞り出し、ケーキに仕上がっていくのが楽しくてたまらなかった。母の夏子が自宅で開いていた英語塾に来ていたお兄ちゃんやお姉ちゃんも呼び、クリスマス会をするのが恒例行事だった。

中学生になる頃、祖母が亡くなり夏子と 2 人になったゆりは、それまで住んでいた神戸の家ではなく、奈良の児童養護施設で暮らすことになった。夏子が急に独り言を話すようになり意思の疎通が取れなくなったため、伯父と伯母がそのように取り計らったのだった。しかし、ゆりは夏子と離れたくない思いから児童養護施設を抜け出し、話し合いの末、無理やり神戸の家に夏子と 2 人で戻ってきた。それからは、独り言を呟き一日中寝ていることの多くなった夏子と 2 人で過ごした。もうすぐ夏子と 2 人で過ごす 2 回目のクリスマスを迎える。

「お母ちゃん、買い物一緒に行く？」

「うん、行く」

ゆりは、夏子の顔を覗いた。瞳に力はないが、口角がきゅっと上がっている。調子はいみたい。

スーパーは夕方のセールで混みあっていた。4 人程並んでいたレジの順番があと 1 人というところまできて、ゆりは牛乳を買い忘れたことに気がついた。すぐを取ってくれば、間に合いそうだ。

「ちょっと、牛乳忘れたから取ってくる。並んどいてね」

ゆりは夏子に買い物かごを手渡し、牛乳売り場へ走った。

ゆりが戻ると夏子の番が来てちょうどレジ打ちが済み、何も言わない夏子にレジの人が

しきりに話しかけている様子だった。

「すみません」

レジ係の女性と目が合った。

「これも一緒をお願いします」

後ろに並んでいた男性も、ゆりと夏子を交互に見た。

「あの、お金払います」

えっ、というようなレジ係の女性の目だった。夏子はうつむいて立ったままだ。その場にいる人達の視線は、夏子の方に集中した。ゆりは自分ぐらいの年齢の子と親と一緒に買い物に来たら、親が取り仕切って代金を払うのが普通なんだろう、と思った。これでは、夏子がついて来ているだけだ。

ゆりは、会計を済ませたカゴをレジ台から袋詰め台に移動しながら、腹が立ってきた。

「お母ちゃん！ お店の人が話しかけてきたら、返事せなあかんよ。無視してるみたいやん」

話しながらゆりは、なんでこんなことを教えたりしないといけないんだろうと、情けなくなってきた。隣を見ると小学生ぐらいの女の子と、お母さんらしき人が袋詰めをしていた。お母さんらしき人は「魚を入れるビニール取って」と女の子に言っている。買ったものを次々と袋に詰め、手を動かしながら目も口も動いている。夏子を見ると、何もせずその場に立ったままだ。カゴが目の前にあるが、誰かが袋詰めをしてくれるのを待っているようにも見える。ゆりは長く深い溜息をひとつつくと、耳の上あたりがかっと熱くなるのを感じた。

「お母ちゃん！ 袋に入れへんの？」

自分が袋詰めをすることだってできる。でも、夏子がそれに気付けないということに我慢ができなかった。隣にいた女の子とお母さんは、もう袋詰めを済ませてスーパーから出て行ってしまった。

ゆりの声を聞いて夏子はゆっくりと袋に牛乳を入れだした。今にも泣きそうな表情で袋詰めをしている夏子を見ていると、ゆりの方まで泣きたくなってきた。

「ちょっと遅刻や早退が多いですねえ。来年は受験やしね、気を付けてもらわないと」

あと1週間ほどで冬休みに入る日の放課後、ゆりは担任の田宮先生に職員室へ呼ばれた。田宮先生は出欠簿を広げながら、遅刻や早退が多いと高校入試で不利になることがあると説明した。先生の右手には、昨日全て返された期末テストの点数一覧が握られている。テストは、散々な結果だった。

「はい……」

そう言いながらゆりは、今朝のやりとりを思い出していた。

「しんどい、頭が痛い……」

夏子の青白い顔が、朝からしょんぼりしている。

「大丈夫？ 病院行く？」

うん、と低い声が聞こえる。今から、病院……。

これまで、しんどいと言う夏子を何度も病院に連れて行った。でも、病院では体のどこかの調子が悪いのではなく、「心の方」だと言われた。病院に連れて行っても、すぐに治るものでもないことはわかっている。

朝から夏子が「しんどい」と言う。話が通じる時があったかと思えば、通じない時もある。ひとりで笑っている日もあれば、泣いている日もある。調子の「波」は、何かの影響を受けているのか、いないのか。心の中身は目に見えないから、外に表れた調子で判断するしかない。誰だって体調の良い日もあれば、悪い日もある。夏子の場合はそれが心のしんどさや、訳のわからない言動なだけだ。

「病院ね、今からは無理やけど。じゃあ、帰ってきたら一緒に行こか？」

一瞬、「早退」と頭をよぎったが、遅刻をして行った上に早退もするととなると、言いにくい。

いつも一緒に登校する林さんに「先に行って」と電話をかけ、夏子といくつかやり取りをして、時計を見ると 8 時半になっていた。次第に体の力が抜けていく。今から学校に行っても、遅刻だ。

「お昼ご飯、冷凍庫にあるピラフ食べてね」

そう言いながら、忘れてしまわないかと気になった。

「お皿、置いとくからね」

布団に入って横になったままの夏子に言った。テーブルには空っぽのお皿だけが置いてある。夏子が冷凍庫からピラフを出してレンジで温められるかどうか、わからない。すぐに食べられるように温めておいた方が良さかもしれない。お皿にラップをして置いておこう。

「行ってくるね」

家にいてね——小さい子に言い聞かせているみたいじゃないかと思いながら、ゆりは家を出た。

いつもの道を小走りで学校へと向かう。制服を着ている子はもう歩いていない。街の中で、ひとり制服姿が浮いている。私服だと気にならないことが、制服を着ていると気になる。校門を通り過ぎると、校庭から掛け声が聞こえてきた、体育の授業で男子がサッカーをしている。ゼッケンの枠線が青だから、ひとつ上の 3 年生だ。

校舎に入ると、向かい風が強くゆりの体に吹きつけた。誰も通っていない廊下がいつもより広く感じる。静かな階段を上る。ちょっと時間がずれただけで、皆に置いていかれたような気になる。学年でいちばん騒がしい女子も、やんちゃな男子も、おとなしく箱の中に収まっている。1 人ひとりの事情は違うのに、皆が同じでないといけないのはなぜなんだろう。

教室の引き戸を開ける。全員目がこちらを向いた。先生と目が合い、軽く頭を下げた。

数学の授業だった。先生の動きが一瞬止まったが、また続きの説明を始めた。最近、勉強している内容が全くわからない。遅刻や早退で授業を聞き損ねると、もう次の単元に進んでいて、ついて行くことができない。自分なりに解いてみても、答えが合わない。

2学期の終業式の日がきた。帰り道、ゆりと林さんはいつもの帰り道を並んで歩いていた。

「林さん、明日遊べる？」

「あっ、明日からな、父さんの田舎の鹿児島に帰るねん。今年は早めに帰るって父さんが言ってる」

「そうなんや……」

「お正月もあっちで過ごすけど、帰ってきたら遊ば。お土産いっぱい買ってくるわ」

「うん、ありがと」

林さんがゆりの顔を覗き込んだ。

「今日やったら遊べるよ。カラオケ行く？」

「うん、行きたい！」

「じゃ、1時に家に来てね」

林さんの家から細い道を抜け、車が行き交う大通りに出ると、カラオケボックスがある。中2になってから何度か2人で来た。こういう場所に自然に行けることが嬉しいなとゆりは思った。

翌日、林さんは家族で鹿児島に帰ってしまった。暇だから宿題をしようと思ったが、解き方がわからなくて、なかなか進まない。

クリスマスイブの日がきた。5時半。辺りは真っ暗になっている。隣の酒屋さんからは、店主のおじちゃんとお客さんの笑い声が聞こえてくる。玄関のドアを開けたゆりはしばらくそこに立ち、耳をすませた。しんとした廊下が氷のようで、外よりも寒く感じた。電気のついていない部屋、台所、廊下。一番奥の夏子がいる部屋だけ、ぼんやりと電気がついている。ゆりが買わなければ、家のテーブルの上にはクリスマスらしいものが何もない。だけど、ひとりで生クリームを泡立てる気にもならない。

皆、どんな風に過ごしているかな……。街中の家の窓から、明るい光と笑い声があふれ、自分の家だけが、分厚い壁で覆われているような気分になる。

玄関の門扉と取っ手がこすれ合う、カランという音がした。

誰か来たみたい。肩に力が入った。台所から廊下に顔を覗かせると、玄関に面した窓の型板ガラスに黒い人影が動くのが見えた。誰かが入ってきた。肩の力がより一層強くなる。

「まいどお」

おっちゃんや、とゆりは安心した。午前中に隣の酒屋さんで灯油を注文していたことを思い出した。足音が家の前、横、裏へと動き、また玄関まで戻ってくるのを待った。

「おーい、ゆりちゃん。灯油、裏に置いといたからなあ」

ゆりは勢いよくドアを開けた。

「はい、はい、1500万円やんね」

ゆりは1000円札に500円玉をのせて、両手で渡した。

「おおきに。ケーキ食べたか？ これ、お客さんが持ってきてくれたんやけど、お母さんと食べ」

おじちゃんが手渡してくれたお皿の上にショートケーキが2切れのせてあり、ラップがふんわりとかけられていた。

「大きい。これ、ホールの4分の1ずつ？」

「そうや。後の残りは、おっちゃんとおばちゃんに分けるわ」

おじちゃんは、「まいどあり」と言いながら敬礼をして帰っていった。

クリスマスに続くお正月はそれらしい行事もなく、普段と変わらず静かに過ごした。

3学期が始まってすぐの3連休前、「学習の記録」が配られた。

「12月の期末テストまでの記録や。君たちは来年、受験の年や。今まで習ってきた内容をしっかり復習して、後悔のないようにしていこう」

田宮先生がホームルームで話したすと、それまで騒がしかった教室がしんとした。

そういえば、最近、クラスでも高校入試や塾の話がよく出る。ほとんどの子が塾に行っているような気がする。ゆりのテスト結果は20点台、30点台が並ぶ。

3連休の初日、学校と家庭とでやり取りをしている「学習の記録」を夏子に渡した。連休最終日の夜に机の上を見ると、「学習の記録」が置いてあった。開いてみると、保護者からのひとこと欄にメッセージが書かれていた。

『いつもお世話になり、ありがとうございます。確認しました』

今までメッセージが書かれていることはなかったのに――。

明日はこれを先生に見せられると思うと、顔がにやけてくる。楽しみだなと思いつつゆりは眠りについた。

ゆりは、ギャーという悲鳴で目が覚めた。

え、え、と思っているうちに、横になっていた床がものすごい力で揺さぶられているのを感じた。部屋ごと大きな力で振り回されているような気がする。地面の下から突き上げてくる揺れの波、ガラスが割れるような音、何か^{きし}が軋んで倒れるような音。暗くてよく見えない。何が起きたのか、しばらくわからなかった。

しばらくして揺れは収まり、何も聞こえなくなった。おそるおそる布団から起き出したゆりは、真上に手を伸ばし、部屋の電気のひもをつかもうとした。何も見えず、ひもがありそうな場所を何度もつかんだ。天井に向かって何度かつかむ格好をしていると、手にひもの感触がありそれを引いた。

「ん？ あれ？」

カチカチという音だけで、電気がつかない。

「お母ちゃん！」

さっきの悲鳴は夏子の声だ。2階から1階へ向けて叫んだ。真っ暗な中、壁を伝って1階に下りた。

「ゆり……？　すごく揺れたね」

姿はよく見えない。でも声の調子で無事であることがわかり、すっと力が抜けた。

「お母ちゃん、地震やね？　何か、割れた音がしたけど」

台所の電気もつかない。テーブルに触れると、何か液体のようなものが手についた。ゆりは手を洗おうと洗面所の方へ行き、水道の蛇口をひねったが、蛇口からの手ごたえはない。何の音もしない。

「水も出えへんよ」

電気も水道も止まってしまった。一体、どうなってしまったんだろう。

時計が6時半を過ぎると外が次第に明るくなり、部屋の中がはっきりと見えるようになってきた。

「うわ……」

和室の飾り棚の上に置いてあった陶器の人形や、日本人形の入ったガラスケースが床に落ちて陶器やガラスの破片が散乱している。

「おーい、ゆりちゃん、大丈夫かあ」

隣のおじちゃんが、ドアを叩きながら呼びかけた。

「うん、大丈夫——」

あ、そうか。電気をつかないからチャイムも鳴らないのか。玄関のドアを開けると、近所の人たちが集まって話していた。おじちゃんの目はいつものように笑ってはいない。

「家の中、めちゃくちゃやわ……」

家のドアを開けると、植木鉢がひっくり返り、茶色の屋根瓦が6,7枚、地面に落ちて割れていた。落ちた瓦を集めて道の隅に寄せていると、ヘルメットをかぶった林さんのお父さんが自転車で近づいてくるのが見えた。

「ゆりちゃん、怖かったなあ。お母さんは？」

「うん、怖かったあ。お母ちゃんは大丈夫」

「そうかあ。無事でよかったわ。水、出えへんやろ。おじちゃんとお風呂の残り湯、これ家に置いとき」

林さんのお父さんは自転車の荷台にひもで括ってあったポリタンクをどんと置いた。

「飲まれへん水やから、トイレとかに使ったらええわ。飲むのはあるか？」

「ポットのお湯とか、冷蔵庫にお茶は少しある。おじちゃん、ありがとう。おじちゃんとは皆、大丈夫なん？」

「うちは大丈夫やから、心配いらんよ。学校を見に行ったら休校の張り紙がしてあったから今日は休みや。北区も揺れたけど、海側の方が被害も大きいみたいや。電気があかんから、ラジオあったらつけとき。それと、まだ余震があるから、今、外を片づけるのは危な

いで」

林さんのお父さんは、軍手をはめた手で瓦の破片を道の脇に寄せた。

「邪魔にならんかったら、ええから。これぐらいにしとき。家の中でもタンスとかがない所でおらなあかんで」

そう言ってまた自転車をこいで坂道を上っていった。

9時ごろになると、冷蔵庫から息を吹き返したようなブーンという音がし始めた。

ゆりが慌ててテレビの電源を入れると、ヘリコプターからの中継とともに、“神戸で大地震 長田・灘・須磨・西宮で火災”という文字が目飛び込んできた。黒い煙が上がっている空からの映像が映し出されている。1カ所だけでなく、2カ所も3カ所も。死者200名だと言っている。神戸が大変なことになってしまった。

どのチャンネルも神戸の地震のことしか放送していない。被害は神戸だけでなく、宝塚や西宮の方にまで及んでいると言っている。ゆりは宝塚と聞いてすぐに、真鍋さんが思い浮かんだ。真鍋さんは、児童養護施設から逃げてきたゆりを、一晩泊めてくれた祖母の友人だ。その後、ゆりの親戚から責められたりしたようで、「ゆりちゃん、ごめんな」と言いながら、もう関わるのをやめると言われたのだった。あれから1年ほど経っているが、1度も連絡を取っていない。でも、いつも心の隅で真鍋さんのことが気になっていた。

真鍋さん……。電話してみよう。

受話器を取ったが何も音がしない。電話がつながらなくなっている。

テレビから報道される行方不明者の数が増えていく。電車もバスも止まっていると言っている。

ゆりはいてもたってもいられなくなった。真鍋さんと娘の瞳さんは、無事なんだろうか。2人の笑顔が頭の中に思い浮かんでは消えていく。夜になっても救急車や消防車、パトカーのサイレンがあちこちから聞こえた。「余震」に注意してくださいと、テレビから呼びかけが続いている。空を飛び回っているヘリコプターの音も1台や2台ではなく聞こえてくる。

夕方になると、飲み水を配水してくれる神戸市の車が家の近くまでまわってきた。……真鍋さんの家は、水道が止まっていないだろうか。

いつも寝る時はゆりが2階で夏子が1階だが、今日は夏子の横で寝ることにした。また大きな地震が来るんじゃないだろうか。その時はどうしよう。朝から、ずっと胸がどきどきしたままのような気がする。横になっていると、小さな揺れでもより敏感に感じられる。昼間、頻りに余震があったせいか、揺れていないのに、揺れているような気がする。ずっと体の芯に力が入ったままだ……。

明るる朝ゆりは、ご飯を炊飯器で炊ける最大量の5.5合炊いた。

「冷たあつ」

祖母から教わったお米のとぎ方を繰り返している内に、手が真っ赤になった。たくさんのお米の量に、手首と肘の間ぐらいまで水に浸かった。

ガス釜に火がついたのを確認したゆりは、揺れが来たらすぐにスイッチを切ることがで

きるよう、炊飯器の前でじっと火を見ていた。こんなに多くのお米を炊くことは久しぶりだと思った。

炊飯器の蓋のすき間から白い泡がふくらみ、湯気がふんわりとゆりの鼻までやってきた。「熱う」

炊き立ての柔らかいご飯を、すぐにしゃもじで混ぜ、両手に塩をつけて、ご飯を三角に握って並べた。12個のおむすびが並んだ。2つはお母ちゃんに置いておこう。

「お母ちゃん、ここにおむすびを置いとくから、お昼に食べてね」

うん、と小さく夏子の声をした。晩ごはんまでには帰って来ないといけない。

真鍋さん、食べるものはあるかな。飲み物はあるかな。テレビの画面に映し出されていた火事で燃えている家や崩れてしまった家と真鍋さんの家が重なる。家の下敷きになったりしていないだろうか。電話の受話器を取ったが、まだ何も聞こえない。

おむすびとタオル、防寒用のひざかけをリュックサックに詰め、隣の自動販売機で買った缶入りのお茶10本を旅行カバンに入れて自転車の前カゴに積んだ。配水車からもらった水も、水筒に入れた。何を持って行ったら役に立つんだろう。電気がつかないかもしれないから、懐中電灯も入れた。

「お母ちゃん、夕方には帰るから絶対に家にいてね。ちょっと……」

そう言いかけたゆりは、口ごもった。宝塚の真鍋さんの家まで自転車で行くなんて、夏子が心配するかもしれない。だからといって、林さんの家に行くのでは近すぎる。

「ちょっと、地震で困っている人の手伝いに行ってくる。夕方には帰るから」

ゆりは玄関を出て自転車にまたがり、ペダルをこぎ出した。もし途中で、もう1回大きな地震があったらどうしよう。でも、真鍋さんが生きている姿を、この目で確かめずにはいられない。

神戸から宝塚までの道は、どう続いているんだろう。ゆりは、バスで神戸駅まで行った時のルートを思い浮かべた。電車の路線図も頭の中に描いた。まず三宮に出て、そこから大阪の方へ行くことはわかる。電車だったら西宮北口駅で乗り換えるから、道路もそこを目指せばいいかもしれない。

ゆりは『大阪』と書かれた地図の標識を目印にペダルをこいだ。三宮方面まで下っていく片側一車線の有馬街道は車であふれかえっていた。こんなに車で混んでいるなら、宝塚へ行くにも自転車の方が早いと思った。平坦な道を進んでいくと、トンネルが見えてきた。いつもは神戸駅にバスで行く時に抜ける、暗いトンネルだ。等間隔で頭上に並ぶオレンジ色の電灯が、今日は消えている。車のブレーキランプが赤く一列に連なっている。ヘッドライトで照らされたトンネルの中はよく見えた。トンネルに入ると、車道より一段高くなった歩道がある。人と自転車がやっと通ることができるほどの幅だ。自転車を押し、車が一列に連なる横を通り過ぎていく。三宮の方では地面が割れ、家やビルが崩れてしまったり、高速道路が倒れたりしているとテレビで報道していた。宝塚までの道を自転車で通れるのだろうか。でも、行くしかない。ゆりの他にも、自転車でトンネルを抜けていく人が

何人もいた。

トンネルを抜けると両脇に木々が広がり、下り坂になった。ゆりは自転車にまたがり、坂を下っていく。ペダルをこがなくてもスピードが出る。

「わっ！」

道路には、細かい石や大きめの岩が転がっている。こんな所でタイヤをパンクさせたら、もう前に進めない。ゆりはブレーキに指をかけながら、進路の少し先を見て行くことにした。

有馬街道を下り切ると平坦な道になった。すれ違う人の表情が、恐れや不安であふれているように見える。たくさんの方が亡くなり、建物が壊れ、哀しみや怒りで街が泣いていた。ゆりは、自分の住んでいる北区から兵庫区、中央区、灘区、東灘区と電柱にかかっている住所板を確認していった。その電柱も倒れていたり、電線が垂れ下がっているところもある。頭上からはヘリコプターの音が数台聞こえる。崩れた家や電柱などで道がふさがってれば、別の道を探さなければならない。

知っている景色があれば安心する。そう思って自転車をこいだ。しかし、ゆりの知っている神戸の景色とは違っていた。民家の壁が崩れて、そこにあったはずの家がない。その横に建つマンションも、反対側の家に倒れかかり、1階の入り口がつぶれてしまっている。ここに住んでいた人たちは、どうなってしまったんだろう。進んでも進んでも、見えてくる建物は傾き崩れており、地面が割れているところもある。道は歩いている人、自転車の人、車やバイクであふれている。信号機も消えていて、人も車もゆっくりとお互いを見合いながら進む。いつも見ていた街が壊れている。消防車や救急車のサイレンが、あちこちから聞こえ、道路は車でごった返している。大阪の方から神戸へ来る人、反対に大阪の方へ向かう人。誰も何も話さない。ただ前に進んでいく。

西宮北口駅に着いた。

「お腹すいたあ」

ゆりは通りかかった公園で、自転車から降りた。公園の中に入ると生垣の脇にある石に腰かけ、リュックを下ろした。公園には、10人程の人がいた。よちよち歩きの男の子が駆け回る以外は、皆、時間が止まったようにうつむいている。ゆりはリュックを開けた。おむすびを食べようか……。でも、真鍋さんが食べ物に困っていたら、おむすびは1つでも多い方がいいかもしれない。食べ物が届いていないところもあるとテレビで言っていたし。

でも、お腹すいた。

ゆりから少し離れたところに、おばあちゃんが1人で座っていた。疲れているように見えた。じっと見ていると目と目が合い、おばあちゃんは会釈をした。優しくな目、とゆりは思った。

「あの、地震、大丈夫でしたか……これ……食べますか」

一瞬、真鍋さんの分、と思ったが、おばあちゃんがしんどそうだし、1個ぐらい、と思っ

て手もとまで持っていった。

「ありがとう。お姉ちゃんのところは大丈夫？」

おばあちゃんは、しわのある細い手でおにぎりを受け取ると、少し笑顔になったように見えた。朝、にぎった時はあんなに熱かったおにぎりが、冷たく固くなっている。おばあちゃんはおにぎりを温めるように両手で包んでいる。

「私の家は神戸の北区の方で、まだ被害は少なかったです。でも、宝塚に知り合いの人がいて、心配で来たんです」

「そうか」

「おばあちゃんは？ 家は大丈夫でしたか」

「うちはね、家は半分あかんようになってしもた。あと、店がね」

おばあさんは、1945年の神戸の空襲から、ひとりで息子さんを育てながらお惣菜屋さんを続けてきたこと、今は西宮でひとり暮らしただけど、息子さん夫婦が大阪にいて時々来てくれることをゆりに話した。ゆりも、神戸で母と2人で住んでいて、母が病気で、と説明した。

「空襲で焼け野原になっても、また立て直す。昔から神戸の人はそうやって生きてきた。

ぜ

口になってもまた、やり直す力が人間にはあるんやで。しょうがないことが起きても、なに

くそと思って、またやっていくんや」

「またお店をするんですか？」

「やるよ、お客さんがおる限りは……今は店の形がないけどな。地震で家族や家を失った人、

悲しんでいる人を元気づけたい。思ってもみなかったことがあるんは、人生の大前提やさか

か

いな——その中で命があったり、動けることはありがたいことやと喜ばなあかん。お姉ちや

んも、お母さんを大切にしておいてな」

最初に会った時には、弱々しそうだと思ったおばあさんの中から強い力を感じた。

ゆりは腕時計を見た。12時半。もっと話したいけれど、行かないと。

「おばあちゃん、そろそろ行きます。宝塚のおばちゃんも、無事やったらいいんやけど……」

「うん、はよ行ったり」

「おばあちゃん、またお店できると思います」

「ありがとう。おむすび、おいしいな。おおきにな」

大事そうに両手で包んだおむすびを食べながら、おばあちゃんは笑った。

ゆりは、公園を後にした。西宮北口駅からは、『宝塚』への標識を頼りに線路沿いの道を

自転車で走る。しばらく行くと、見覚えのある景色が目の前に広がった。

真鍋さんの家はもうすぐ。駅からの道もよく憶えている。真鍋さん、無事でいてくれますように。

真鍋さんの家が見えてきた。ゆりは家の隅から隅まで目をこらして見るためにその場で立ち止まった。少し離れていても、家の形があることは分かる。屋根の上では瓦が飛び跳ねた後のように、あちこちずれている。

「あぁー、あった」

思わず声が出た。家は崩れていない。でも、中はどうだろう……？ 真鍋さんと瞳さんは、家具の下敷きになったりしていないだろうか。会うまでは安心できない。ゆりは、自転車をこぐ足に力を込めた。門柱は傾いている。今までの悪い想像ばかりが、頭の中に浮かんでくる。門の前に自転車を止め、急いで玄関のドアを叩いた。鍵は開いている。

「真鍋さーん！ 瞳さーん！」

ドアを開けながら呼ぶと、奥の部屋から真鍋さんがゆっくりと覗いた。

「ゆりちゃん……！ どうやって来たんや？」

真鍋さんが大きな目をして近づいてきた。

「あっ、自転車で」

「あんた、お母さんは大丈夫か？」

「うちは大丈夫。おばちゃんと瞳さん、無事でよかったぁ。電話がつながらへんかったから……」

あれこれ考えてしまっていたことが現実でなくなり、力が抜けて土間の奥の上がり^{かまち}框にへたりこんだ。家の中では食器棚やタンスが倒れてしまったそうで、壊れたものを瞳さんが庭に運び出しているところだった。離れにあるお風呂の壁が崩れ、倉庫も倒れてしまったけれど、京都に住む息子さんが助けてくれるから大丈夫とのことだった。

おむすびとお茶をリュックから出し、玄関の棚の上に置いた。台所にかかった時計は、2時になるところだ。今度は神戸の夏子が大丈夫なのかが気になってきた。

「来てすぐやけど、帰るね。来るときも時間がかかったし」

「ゆりちゃん、ありがとう。これ持って帰り」

真鍋さんは箱を差し出した。開けると、クッキーの詰め合わせだった。

「いいのに、おばちゃん」

自分がもらってもいいのだろうか、と思った。

「こんなもんしかないけど、これだけでもさして。してもらうだけは、心苦しいねん」

「うん、じゃあ」

ゆりは箱を受け取った。1年前、関わるのをやめると言われたのだから、ここからまた連絡を取り合うつもりはない。自分との関わりをもつことで、真鍋さんに迷惑をかけてしまうのがつらい。ただ、無事かどうか、助けになることはないかという気持ちだけがゆりを

ここまで連れてきた。

地震があって知らない人とも自然に話をし、長い間、会わなかった人とも構えずに話を
する。ゆりは、皆の心がぎゅっと固まったような気がした。道を行き交う人と目が合うと、
何も話さないけれど、「大変やったね」「大丈夫ですか」という心の声をやり取りしている
ような気がする。

真鍋さんの家を後にして、来た道を引き返す。辺りが薄暗くなってくると急に、家が遠
くに感じられた。三宮辺りにさしかかったところで腕にはめた時計を見ると、5時をまわっ
ていた。ゆりは家へ帰れるかどうか心配になってきた。もし、帰れなかったら……。慌て
る夏子の顔が思い浮かぶ。ゆりは首を横に振った。まだ5時だから、行ける。

やっと平野の交差点に着いた。朝、スピードをあげて長い坂道を下ってきたことを思い
出した。ここからの上り坂は、自転車をこいで行くことはできない。ゆりはまたがって
いた自転車から降り、押して歩き始めた。木々の緑色もわからないほど、辺りは暗くなっ
ている。すぐ横の車道は車が列を作っているが、白線の脇を歩いている人はいない。「ここを
上らないと……」

「帰れるのかな……」

寒い。足がもう、動かすのにも重い。前に進んでいっているのかがわからない。何台も
のサイレンの音がまだ遠くで聞こえる。

ゆりは自転車を押しながら、今日会ったおばあちゃんのことを思い出した。

思ってもみなかったことがあるんは人生の大前提――。

お母さんを大切にしておいてな――。

おばあちゃん、また頑張るって言った。それを思い出すと、力が湧いてきた。

「絶対……帰る！」

何度もそう繰り返しながら、上り坂に向かって1歩ずつ足を進めた。すぐ横の車道には
車が列をなしている。ひとりではない。

行く時に通ったのと同じトンネルをくぐる。朝はついていなかったオレンジ色の電灯が、
等間隔に頭上で光っている。何もなく帰ってくることができたことは喜ぶこと。お母ちゃ
んがいてくれることも喜ぶこと。

家が見えてきた。玄関は真っ暗だった。よく見ると、型板ガラス越しにかすかな光がぼ
んやり見える。お母ちゃんの部屋の電気だ。帰ってきた。わずかだけど光がある。ゆりの
心にも明かりが灯った。

※この物語は実際の体験と、それを探究する虚構の物語をもとにしています。

実在の人物及び団体のプライバシーに配慮し、作中では架空の名称をあてています。